

和歌山県ゆかりの作家の作品が展観されるコレクション展。



新しいものに加え伝統的なものも取り入れるよう設計されている。外に向かって突き出た数多くの庇屋根は和歌山城の屋根の反りと同じ形状で、外階段付近の給排気塔は灯籠がモチーフになっている。地上2階・地下1階建て

の建物は、鉄筋コンクリート造だ。敷地内には屋外展示もあり、日焼けや降雨など日々の自然環境により時間をかけて変化してきた作品が間近で鑑賞できる。掲出した保田春彦『聚落を囲う壁Ⅱ』はその一つだ。また、1階と2階に設けられた展示室は落ち着いた雰囲気、ゆったりとくつろいで美術鑑賞できる空間となっている。

和歌山県立近代美術館は、神奈川県立近代美術館、国立近代美術館（現在の東京国立近代美術館）、国立近代美術館京都分館（現在の京都国立近代美術館）、兵庫県立近代美術館（現在の兵庫県立美術館）に続く、国内で5館目の「近代美術館」。「近代美術館」という存在が珍しかった時代、その名を掲げて最初に設立されたニューヨーク近代美術館をモデルに、各館は展覧会を企画し、それぞれ独自のコレクションを形成していった。

近年、全国にある近代美術館の中には、「近代」の文字を取り、県（立）美



上/保田春彦『聚落を囲う壁Ⅱ』1994-1995（平成6-7）年/鉄
左/バリー・フラナガン『ねじまがった釣鐘の上を跳ぶ野兎』1989（平成元）年
ブロンズ

和

歌山城を北方に望む、和歌山県立近代美術館。美術館・博物館共通の敷地内には、緑豊かな奥山公園がある。

今でこそ館名に「近代」が付くが、前身は和歌山県立美術館だった。1947（昭和22）年の「和歌山県美術展覧会」をきっかけに、和歌山県の美術界は活発な動きを見せるようになったが、その当時、和歌山県には美術館やそれに類する展示施設がなかった。「和歌山県に美術館を」という県民の願いにより1963（昭和38）年に誕生したが、和歌山県立美術館。「第1回県美術家協会展」を皮切りに、これまで多くの展覧会を開催し、県民に親しまれる美術館として成長していたが、和歌山県民文化会館の建設をきっかけに、県

民の作品発表の場としての役割はそちらへ移行。さらに明治時代以降の美術を扱う「近代美術館」と、江戸時代以前を扱う「県立博物館」とに分離することとなる。そして、1970（昭和45）年11月、文化会館内に和歌山県立近代美術館が開館した。再出発したものの、県民文化会館での活動という制約があったため、独立を望む声徐徐に拡大。ついには、新館建設の計画が持ち上がったのだ。

1994（平成6）年、新しい和歌山県立近代美術館が現在地に誕生した。周辺の恵まれた環境を十分に活かせるよう、建物などは黒川紀章建築都市設計事務所によってデザインされた。黒川が設計の基本テーマとした「歴史との共生」というコンセプトに基づき、

緑豊かな敷地内で、くつろげる美術鑑賞の場を。



一部がガラス張りの外壁と、外に突き出た庇屋根がモダンな雰囲気を演出している。